

【特別企画】

高校英語授業のディベート的活動の 実践と評価

Debate-Based Activities: From Pedagogical Practice to Assessment

塩原洋二

明治大学付属明治高等学校・中学校

SHIOBARA Yoji

Meiji University Meiji High and Junior High School

Parliamentary debate is a widely utilized pedagogical practice in secondary school English classes in Japan. This paper presents debate-based activities and proposes methods for assessing students' outcomes following these activities. While previous research has addressed debate-based activities, such as pair debates, they often lack a focus on assessment and feedback. This paper specifically explores the summary and comment activity, providing a framework for conducting performance tests. Key factors for successful implementation include a step-by-step approach, clear communication of detailed assessment criteria, and encouraging post-performance self-reflection. The paper concludes with suggestions for novice debate instructors seeking to deepen their understanding of debate pedagogy.

Key words: parliamentary debate, debate-based activities, assessment, performance test

Debate and Argumentation Education: The Journal of the International Society for Teaching Debate
2025, Vol.7, pp. 20-31.

1. はじめに

即興型英語ディベート¹の指導実践をはじめて 10 年が経とうとしている。私自身 10 年程

¹ ディベートと言っても、準備型、即興型、スピーチ時間の違い等様々にある。ここでは PDA（一般社団法人パラメンタリーディベート人材育成協会）が採用している

前に初めてディベートに出会い、初心者教員ディベーターとしてディベートのラウンドやジャッジを細々と続けてきた。途中、勤務校で中学生を担当した年次は、授業では直接指導できなかったが、付属高校生を募って大会参加をするなど何かしらの接点を持ち続けてきた。初心者教員のディベートに対する紆余曲折については拙研究発表・拙論（塩原, 2022a; 2022b）を参考にしてほしい。ディベートの魅力のひとつは細く長く続けられ、一度枠組みを知れば、様々なトピックについて即興の議論を展開できることだろう。生徒に即興型英語ディベートを紹介し指導すると、多くの場合「日本語でもやったことはありません」、「3分も英語で話し続けられません」といった不安の声が最初にあがる。そして、即興型英語ディベートの枠組みと、メリット・デメリット、利害関係者といった思考フレームワークを教える。そうすると、「フォーマットがあれば3分間話し続けられる」、「今まで考えもしなかったことを知りました」、「社会問題について考えるようになった」といった自己変容を実感することになる。自身の勉強の成果を肯定的に捉えたい傾向を割り引いても、多少なりとも自身で変化が感じられるというのは大きな変化の証左でもある。本稿では即興型英語ディベートについて授業実践、評価方法、教員の研鑽方法について述べる。

2. ディベートをするための授業実践

私の勤務校はディベートや議論に特化した科目を開設していない。各教員の工夫のひとつとしてディベートが取り入れられる場合があるが、そうでない場合も多い。年間を通して指導できないのはデメリットだが、英語コミュニケーションや論理・表現の教科書的话题を深掘りして議論に結び付けられるのはメリットである。また、即興型英語ディベートは一度議論の道筋を教えてしまえば、トピックが変わってもそのまま使えるという枠組みの堅牢さとシンプルさも有効に作用する。

例えば、表1は2016年度高校二年生コミュニケーション英語Ⅱの指導計画である。この年度は2学期期末に50分授業9コマをとり即興型英語ディベートについて指導した。日常では経験できない即興型ディベートの枠組みは、ある程度まとまった指導時間が必要だと考えた。単発の指導を間隔をあけて行っても知識・技能の定着につながりにくいからだ。であれば、教科書指導が多少停滞したとしても、集中的に即興型ディベートの形式やディベートで有効に使える思考フレームワークを説明してしまった方が効率的・効果的である。ディベートの型が一度習得されてしまえば、教科書で新しいトピックが出てきたとしても、型を応用したペアディベート等様々な活動が可能になる。

PM/LO : 3分、MG/MO : 3分、PMR/LOR : 2分（中川, 2017）という最も簡略化された即興型英語ディベートを想像されたい。

表 1 2016 年度高校二年次におけるディベート指導計画

時数	指導内容
1	即興型英語ディベートについて：スピーチ練習
2	スピーチ練習：affirmative
3	スピーチ練習：negative
4	論証する練習：風が吹けば桶屋が儲かる
5	チーム発表・対戦相手決定
6	原稿準備 2 本
7	ジャッジング・初めての試合
8	2 回目の試合
9	立論発表・アンケート

この実践ではスピーチ練習から始め、最後には立論を全体に発表することでまとめとしている。肯定・否定のスピーチ練習後、反論に関するレクチャーはほとんどないまま試合に入っている。私も初めての指導であったため、スピーチ練習中心の指導となっており、反論やチームで戦うというディベートの楽しさについては十分に説明できなかったと思う。2 学期が終わった時点で試合をすることがゴールになってしまい、その後のフォローが乏しかった感がある。

しかし、この指導以降ディベートといえどどういう形式で何をしなければいけないのか生徒が明確に感じられるようになった。続く 3 学期には集中的にディベートの試合を行った。ジャッジングシートを渡し、ジャッジも生徒が行うようにした。また、特に 1 クラスだけ他のクラスより時数が多くなってしまう場合のコマでは、1 ラウンド 50 分で完結する即興型ディベートを行うことが多かった。

この時点では 3 対 3 のディベートにこだわっていたため、教員向け研修等で「3 対 3 にこだわらなくてもよい」という話を聞いたときは蒙を啓かれた。また、その言葉を聞いてディベートから形式を崩したディベート的活動を授業で主に用いるようになった。

3. ディベート形式にこだわらないディベート的活動

ディベート活動が小学生にまですそ野を広げるようになり、同僚も英語ディベートについての指導に入れるようになった。そのため、上記のようなまとまった時間を確保して綿密に指導しなくても、生徒への指示がいき届くようになってきており、即興型英語ディベートをいちから教え込む必要がなくなっていると感じる。大まかな枠組みは分かっているため、例えば立論スピーチくらいであれば、生徒にまずやらせてみて改善が必要なポイントを指導するという指導スタイルに私自身変わってきた。さらに、チーム戦にしてしまう

と一人当たりのスピーキング時間とリスニング時間の比が単純計算でも 1:5 になってしまうので、ペア同士の立論に対して 3 人目の生徒がジャッジをするペアディベート、さらにお互いが肯定側として立論スピーチをするペアディベート (河野,2020)、教科書の話 요약した後に自身の反論や肯定的なサポートを述べるものなど、先人の知恵や私自身のアレンジを加えて、ディベートの枠組みを活かしつつ、個々のスピーキング時間を最大化し思考力・表現力を上げる活動を行ってきた。

この変化の直接的なきっかけとなったのは、2020 年度当初コロナ休校中に開催した英語ディベート講習であった。休校中で生徒へのリーディング課題配布は行っていたものの、スピーキングのような対人のインタラクションを必要とする技能については別途課題設定する必要があると感じていた。講習会では他学年の教員が参加する中、生徒とともに即興型英語ディベートを 2 ラウンド行った。その後の教員フィードバックの中で、「全体の指導時間から考えると一人当たりのスピーキング時間が短い」という意見が出た。ディベートの枠組みの中で考えていた私は思いもしない意見に驚き、聞いた当初は心の中で「ディベートが分かっていない」という憤りを感じた。けれども、少し間をおいて考えてみると、確かに 1 ラウンドを準備時間からジャッジコメントまで 50 分として、一人当たりのスピーキング時間が 3 分だとすると、スピーキング時間はそう多くないと感じた。なにより生徒がどのような力をつけられるのかという生徒目線の振り返りが私自身になく、ただディベートをやらせたいという気持ちが強かったことに気づかされた。

3.1 Summary & Comment

内容理解した英文を要約することは英語の授業でよく使われる手法だ。一般的には大学入試を意識し、ライティング活動で行うことが多い印象がある。最近ではオーラル的な側面の強化を意識してリテリング (佐々木,2020)・リプロダクション (小倉,2024) といった手法も用いられるようになってきた。私自身も、ライティング・スピーキングのモードを問わず要約活動は行ってきた。ディベートでもサマリースピーチはあるが、ディベートというサマリーと、一般的な英語授業での要約というのは乖離があると感じる。前者は肯定・否定どちらかのサイドによりきってなぜ自分たちの勝ちなのかを論じるのに対し、後者は誰が要約を書いてもある程度同じになる内容の包括的理解と常識的な情報の軽重を意識した表現が重んじられるからである。どちらの方法にも一長一短あり、ここでは論じない。本発表ではどちらかという従来型の要約を少しディベートのサマリーにつなげるように自身の意見を付すアレンジとして Summary & Comment という活動を行った。

Summary & Comment は文字通り、内容理解した英文の素材を要約し、かつ自身のコメントを付け加えるものである。スピーキング・ライティングどちらの表現方法でも用いることができる。また、生徒の習熟度に応じて英文素材本文を見ながら行わせることもできるし、見ないで行わせることも可能だ。本事例では、Opinion 1100 Ver.2 (松本, 2017) で扱った近隣への保育所建設の是非と VOA の記事 *What is NIMBY?* (Matteo, 2021) について口頭

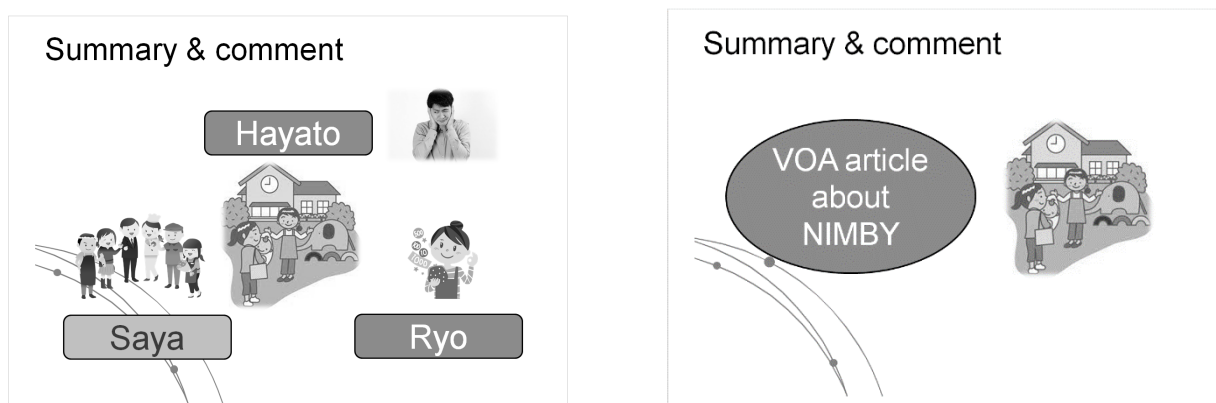
で要約させ、自身のコメントや意見を付け加えさせた。この活動をペアで行い、その後数人の生徒に全体発表をさせた。

この活動のポイントは三つあり、一つ目は新情報を含んだある程度まとまった分量の英文素材を読み込んだ上で行うことだ。生徒にとっては、自身が考えもしなかったような様々な意見とそれらの対比関係が分かってはじめて要約をする価値がでてくる。議論が分かれるような素材を教師がどう選択できるかが重要となる。

二つ目はスモールステップで繰り返し行うことである。まずタスクの繰り返し練習をすることで流暢さが上がることが期待される。継続的に活動を行うことで生徒はこの活動が読解の後に行われることを意識し、読解の質・量ともに上げていくこととなる。また、一気に大量の英文ではなく、細切れに最終的にはまとまった量を整理された状態で活動を行うのが理想である。段々と負荷を上げることができる上、生徒自身で復習をしながら授業が進むので知識の定着を実感するだろう。図 1 の左側は **Opinion1100** の情報 (274 words) のみについてまとめる活動、右側は **VOA** (600 words) の記事も含んでの活動である。復習内容を内包する形で行うことで、生徒のスピーキング内容の深まりを狙うことができる。

三つ目は全体発表後にフィードバックをすることである。スピーキングの流暢さはタスクの繰り返しで向上を図れるが、正確さと複雑さの向上に関しては教師の明示的指導が必要だと考える。場面にもよるが、生徒発表後のフィードバックではグローバルエラーに絞って訂正フィードバックを行いたい。文法・語彙の複雑さの向上に関しては、例えばエラーを恐れ中学英語で代用しがちな表現について、教科書等に載っていた表現を教師がモデルとして提示したい。全体指導の中で個人指導の割合をどうするかは語学指導全般の悩みの種だが、教師—生徒間のインタラクションを教室全体の生徒が聞くことで、生徒の冠詞習得に良い影響を与えたという報告 (Muranoi, 2000) もあり、積極的に活用したい手法である。

図 1 Summary & Comment 活動の際に用いたスライド



3.2 肯定立論・肯定立論・ジャッジコメント

ディベートは肯定・否定のサイドを分けて行うという前提がある。この前提を崩し、同じサイドのスピーチを行いジャッジをする活動は河野（2021）で紹介されており、また著者の講演でもたびたび紹介されている手法である。私のディベート指導を根底から揺るがし、「必ずしもディベートのラウンドをしなくてもいい」という指針を与えてくれたものであった。

この活動はペアディベートとも呼ばれ、与えられた論題についてペアでスピーチを行い、第三者のジャッジを受ける活動である。例えば図 2 のように、A さん：肯定側立論 B さん：肯定側立論 C さん：ジャッジコメント をそれぞれ行う。複数回やる時間的余裕があれば、役割は 3 人の中で入れ替わることができるし、否定のスピーチを行うこともできる。端数が出てしまう場合はジャッジを 2 人にしてもいいし、教員がスピーカーとして入ってもいい。生徒同士でやるときよりもより真剣になり、「こういうふうに言えばいいのか」と学び深まる貴重な機会となる。

この活動の利点は、いやおうなく両者のスピーチの違いが明確になる点だ。同じサイドに立った論点・論証の流れがほぼ並列される形でジャッジに示されることになる。ジャッジがジャッジしやすいだけでなく、スピーカーにとっても説明の方法の改善点を探るうえで大いに刺激になる。

欠点は 2 人目のスピーカーが有利だということである。ただしこれについては一目瞭然であるため、それを受け入れた上で多くの生徒が活動する。英語力に差があるペアリングの場合、1 人目を英語が比較的できる生徒にすれば、2 人目は直前の生徒のスピーチを参考にスピーチをすることができる。

図 2 ペアディベート活動の際に用いたスライド

Mini Debate	Mini Debate
Motion: The government should pay for college. (政府が大学の学費を払うべきだ)	Motion: The government should pay for college. (政府が大学の学費を払うべきだ)
準備(5分)→肯定スピーチA(3分) →肯定スピーチB(3分) →ジャッジコメント(勝敗・その理由)(2分)	準備(5分)→否定スピーチA(3分) →否定スピーチB(3分) →ジャッジコメント(勝敗・その理由)(2分)

3.3 論題発表後の思考整理の手助け

ディベート初心者最大の不安のひとつが、論題が発表されてからの準備時間で思考が整理しきれずにスピーチを始めなければいけないことだ。与えられた論題に対して使

える背景知識が少なく、ディベートの経験値も乏しいため、限られた時間で上手く対応できないものと推測する。それを補うためには二つの方法があり、一つは読解の授業などで取り組んだ内容についてディベートすること、もう一つは学期に扱うディベートトピックを一覧にし、最初の授業で提示してしまうことだ。

前者については、レッスンの最後にディベートが待っているということを学習者に意識させることで、読解の質・量ともに上がることが期待できる。自身の理解が充実すればするほどディベートで話す内容も広げ深めることができるからだ。欠点としては、ディベートのラウンド自体に目新しい議論が出てくる可能性が少なくなってしまうということだ。背景知識を全体で共有しラウンドに臨むということは、言い換えれば、相手が言わんとすることはすでに自分たちも知っている内容である可能性が高い。裏をかいてオリジナルな議論で勝負し、相手の予測を外すという高難度な技が披露されれば、さらに面白いディベートになるかもしれない。

後者は、学期の始めにその学期のディベート授業で扱う論題を複数事前発表し、生徒に考える時間を与えるという手法である。実際のところシートを前にしてインターネット等で情報をかき集めるといった熱心な生徒はほとんどいない。むしろ、論題への取り組みやすさを事前に知らせることで安心感を感じてもらおうという効果大きい。直前の休み時間ではシートを眺めていたりするが、メモをしたりする生徒は少ない。漠然とそのトピックで出てきそうな論点をつかみ、安心を得るというのが事前配布シートの利用方法なのだろう。

4. 評価方法

ディベート等のプロダクティブな活動を行う際、決まって議論の的となるのが評価方法である。ディベートと同じモードで評価したいという場合はスピーキングテストとなり、チームや対戦相手のスピーカーのレベル差によってテストの信頼性が低くなってしまう場合は個人スピーチにという形式のテストとなる。授業での指導との整合性を図りつつ、評価の公平性や時間的に可能かどうかといった複数の要因が関係するため、形式・形態はその時々最善を尽くすしかないだろう。

特にパフォーマンステストと呼ばれる生徒の実技能力を測るテストの場合、事前のアナウンスを丁寧にしてあげることで、テストの波及効果を高めることができる。つまり、生徒がテスト内容を熟知しテストに備えて数多く練習すること自体で、生徒の能力向上を期待することができる。日常の、特にスピーキング活動は即時的でフィードバックを与える機会も少ない。受けたフィードバックを参考に、意味のある文脈の中で再チャレンジできる機会はさらに少ない。生徒はパフォーマンステストがあることを知ることでより集中して自身のトレーニングに励むことができる。

図 4 は 3.1 で説明した **Summary & Comment** を行った学期の最後のパフォーマンステストである。この事例では CAF フレームワークを参考に評価規準を作成し生徒に提示した。本番のテストでは下方の 5 つのトピックからランダムにトピックが指定されるので、10 秒

後に始めるようにという指示をした。点数の切れ目に該当する評価は多くの教員の悩みの種だが、可能な限り定量的に評価を行うことができるようにしている。本事例では採点者は私一人だったので、評価者間信頼性を上げるための協議をする必要はなかった。

生徒には 10 日程前にこのテストが予告され、授業内外で練習に励む。評価規準の明確な説明、スピーキング機会の重要性や貴重さの説明、授業内での帯活動等を合わせることで、生徒が努力してやってみようと思える道筋を作れるものである。このテストの対象は 189 名で、平均値 (SD) は 13.43 (1.60) であった。得点の内訳は、15 点満点:60 名、14 点:54 名、13 点:24 名、12 点:25 名、11 点:15 名、10 点:10 名、6 点:1 名である。

事後の活動としては、テスト直後に振り返りのコメントを書かせるようにしている。内容としてはある程度自由度があり、テストの事前準備をどのようにどれくらい行ったか、本番のテストではどうだったかなどである。直後に自己コメントを書かせるため、生徒は記憶が新しいうちに書くことができる。教師は、生徒一人ひとりがどのようにパフォーマンステストにアプローチしたかを知ることができる。図 3 の通り、評価シート下段にコメント欄（実際には 8 行）を設けており、生徒はこのシートが評価直後に手渡され、他の生徒がパフォーマンステストを受けている間に自身のコメントを書いて待っているという流れである。

図 3 Summary & Comment 活動の評価シート

Class_____No_____Name_____

Summary & Comment Evaluation Sheet

	5 点	4 点	2 点
Fluency	100WPM で 1 分間ほぼよどみなく話すことができる。	Ah や Eh 等 3 秒程度の沈黙の時間が 2 か所程度ある。	Ah や Eh、沈黙の時間が 2 か所以上あり、聞き手が気になるほど。
Accuracy	個々の語の発音と文法が 8 割以上正確で聞き手が充分に内容を追える。	発音・文法は 8 割がた正確だが、内容が伝わらない程の文法や語彙のエラーがある。	発音・文法どちらかが 8 割未満の正確性。
Complexity	使っている語彙・構文レベルが Opinion1100 レベルになっている。	努力はしているが、9 割以上の語彙・構文レベルが高校初級程度。	単文が多く、中学レベルの語彙・構文が多い。

1. E-books are better than paper books. (Jeff) + your opinion

2. Paper books are better than e-books. (Karen) + your opinion

3. We should not build a daycare facility near our house. (Hayato) + your opinion

4. We should build a daycare facility near our house. (Saya) + your opinion

5. We should build a daycare facility near our house. (Ryo) + your opinion

コメント（練習した量、意識した点、伸びた部分、伸び悩んだ部分…等々自由に）

以下は、Summary & Comment のパフォーマンステスト後に提出された生徒のコメント（原文ママ）と得点である。

一週間ほど前から練習し、昨日は一時間ほど練習した。喋る際に同じようなイントネーションにならないよう抑揚をつけて話すよう意識した。後略（15 点満点）

テスト勉強も兼ねて声を出して練習した。主に左ページの熟語部分を意識しつつ、流ちょうさを最も重点とした。実際にやってみると緊張もあいまって、つかえてしまう部分も多く、時間配分がうまくいかずに、自分の意見を言い切ることができなかった。後略（14 点）

全員の意見と自分自身の意見を紙にまとめて書き、一週間前から通学途中やテスト勉強の合間など、時間がある時を見つけたらたくさん練習を重ねた。しかし本番では緊張してしまい、練習通りにスラスラとしゃべれなかった。後略（10 点）

コメントにあるように、事前の原稿を丸暗記するように取り組み、普段と違う状況で緊張して上手くいかなかったという生徒もいた。全体へのフィードバックとしてブルームの分類法を見せながら、暗記することだけでは技能が高まらないという話をした。どれだけ教師が事前の計らいをしても想像通りに事が進まないのが、生身の人間を相手にしている教育の性質でもある。ひとつのテストはそれ自体完璧ではなく、修正や生徒へのフィードバックを繰り返しながら、生徒の成長に資するものとする。この年度は Opinion 1100 や AWL を用いてアカデミックな語彙の重要性を説きつつ、最終的にはライティング活動として IELTS のライティングパートを用いた実践に昇華した。²

5. 教員ディベーター、授業者としての研鑽例

即興型英語ディベートを用いた英語授業という、生徒にとっては普段はやらない特別な形式の授業と意識してしまう。例えば、中学生との雑談でディベートという言葉が出てくると、「怖い」「言い負かされそう」といった感想がすぐ出てくる。実際のところ、ディベートをやりはじめてしまえば、そういった事前の畏怖はすぐ消えてしまうのだが、生徒だけでなくディベート未経験の先生にとっても感情の障壁があるのは否定できないだろう。

ディベートのスピーチの内容理解もままならなかった私が、日本人の英語ディベートならある程度理解でき、教員ディベーターとしてラウンドに立てているのも他の先輩教員ディベーターの直接的・間接的手助けのおかげである。本稿の終わりに、現職教員がどのようにディベートについて探究しているのか参考として付したい。

² ライティング活動の実践については英語授業研究学会第 35 回全国大会発表資料集拙稿（塩原, 2024）を参照されたい。

5.1 教員ディベート練習会参加

多くの団体が英語ディベート練習会をオープンに参加できるようにしており、最近ではオンラインで行われているため移動時間をとる必要なく参加できる。初心者や中級者にも配慮をしている団体も多いので、その活動に参加するのもおすすめである。ディベートの枠組みはただ単にスピーキング練習をしていても身につかないので、普段中高生のディベート大会を主催している団体が行っている練習会が特におすすめではある。また、ディベートの枠組みから離れて単純にスピーキング練習をしたいときもある。そういった場合、ニュース記事を予習した上で当日はスピーキングをするといった英会話コミュニティー等もオンライン上で見つけることができる。一長一短あり、ディベート練習会はそのトピックに対して時間制限はあるものの、自身で議論を深掘りできるし、相手の議論を聞く楽しみもある。ディベートの枠組みを共有しているので、ある程度心の準備をして取り組みことができる。一方ニュース記事を取り上げて話し合うトピックベースのスピーキング練習会は、お互いの与えられたトピックに対する熱量が違うことや、論じる視点がかみ合わないこともある。一人当たりのスピーキング時間に制限もないので、こちらが一方的に話してしまったり、その逆の場合もある。

5.2 良書から議論について学ぶ

即興型英語ディベートを英語授業の枠組みに落とし込んでいく際には教員が著した多くの良書が役に立った。なかには無料でオンライン配布されているもの（小林,2015: 小林,2021 他）もあり、その内容の質もさることながら著者の無償提供という姿勢にも敬服である。特にディベートで扱われる政治・経済から離れて、生徒が自分事としてとらえられるトピックリストには舌を巻いた。その上、論題がパーソナルな事象を超えて、他の起こりうる社会現象と重なるように一般化できるものもあり、一般の英語教員には真似できない工夫が随所に見られる。スピーチ内容を一般化できるかは生徒のスキルや思考力も必要だが、少なくともその素地を残しながらディベートトピックを生徒目線に落とし込んでいくスキルは、長年生徒と共に接しながらディベート指導を行ってきた方にしか培えないだろう。授業でのスピーチ方法のアレンジについては河野（2020）が参考になった。ディベートというと肯定・否定に必ず分かれなければならないという暗黙の了解がある。そうでなくてもいいという視点を提供していただいた。日本語で即興型ディベートの議論の例を見ておきたい場合は加藤（2020）が参考になった。

議論の枠組みという点では、コンサルタント関連の方が書いた作品から、ディベート経験者が書いた著作まで幅広く参考になった。特にフェルミ推定を扱った作品（東大ケーススタディ研究会, 2009）は、日常では普段視覚化計量化しないようなことをどう論理的に概算するかという点において参考になった。論理的思考については、波頭（2004）が俯瞰的にかつ詳細に書かれてあると感じた。Michael Sandel は有名なハーバード大学教授で著作（2010, 2012）も議論の分かれるようなトピックを常に扱っており、テレビ番組も多い。Seo は韓国

からオーストラリアに移住し、ディベーターとして成長していく自分史（2023）を描いている。ディベートの経験のある程度積んでから読むと、その葛藤や喜びなど共感できる部分が多いと感じた。

6. まとめ

私は教員生活が 10 年ほど経ったある日、即興型英語ディベートを同僚に紹介された。それ以前にディベートという形式は世間一般の人が理解する程度に把握していた。当時はディベートの教育実践報告も今ほど多くなく、授業に組み込むには一歩踏み出せないでいた。教員ディベートの研修・講座を受けることで少しずつ自信を高め、即興型英語ディベートの大枠の指導と、各スピーチから派生した活動を導入できるまでに至った。

本稿ではまず始めに、即興型英語ディベートの大枠を指導する方法とその課題について報告した。昨今の学校教育でのディベート活用の隆盛を踏まえると多少丁寧すぎた実践ではあるが、当時の授業時間数・生徒の状況・教科書指導などのバランスをとった上で最善を尽くしたものである。

次に、ディベートのラウンド自体を指導する以外の手法として、ディベートの各スピーチから着想を得たディベート的活動を紹介した。ペアディベートや Summary & Comment は生徒がディベート全体について精通していなくても行うことができる。同時に勝敗をつけたり、要約スピーチを行ったりするなどディベートの楽しさを垣間見ることができる活動である。評価についても可能な限りシンプルかつ計量可能な採点基準を採用し、事前に生徒に公表した上で実施するなど、波及効果が高まるような工夫をとっている。授業で習った範囲でという条件付きではあるが、社会的課題に対して流暢に英語を話す生徒の姿を見て、今後の大学生活での充実が容易に想像できた。

最後に、教員ディベーターとしての研鑽例を述べた。授業・部活動に専念すればするほど、新しい分野への挑戦が時間的にも体力的にもできなくなってしまう。オンラインで日本中の教員ディベーターと交流できるのは、他の研修では得られない直接体験と充実が得られる。自身がラウンドをすることで、生徒の気持ちを再確認できることも大きな財産である。一方、時間はかかるが、議論全般に関する情報をまとめた形で吸収するための文献研究は欠かせない。載せきれなかった書籍ももちろんある。このような地道な研鑽を続けることで、生徒へのフィードバックやパフォーマンステストの評価規準作成を通して、生徒の学びをより一層後押しできると考える。

言語学習は具体的な成果が見えづらく短期的な成長が実感しにくいのも事実だが、ディベートの枠組みやその派生形の活動を用いて、生徒の言語能力向上を期したい。その一助として本稿が多くの方の参考となれば幸いである。

引用文献

- 小倉慶郎 (2024) 『英語リプロダクショントレーニング』 Gakken
- 加藤彰 (2020) 『即興型英語ディベートの教科書：東大で培った瞬時に考えて伝えるテクニック』 あさ出版
- 河野周 (2021) 『中学・高校 英語ディベート入門』 三省堂
- 小林良裕 (2015) 『英語ディベート練習ハンドブック[即興型]An Introduction to Debating in English: Book 4 [Practicing Parliamentary Debate]』 S.A.D. works
- 小林良裕 (2021) 『高校生のための初めての英語ディベート A New Introduction to Debating in English Book 1: for High School Students [Second Edition]』 S.A.D. works
- 佐々木啓成 (2020). 『リテリングを活用した英語指導：理解した内容を自分の言葉で発信する』 大修館書店
- 塩原洋二 (2022a) 「高校生即興型英語ディベート指導：未経験教員が生徒と大会出場を果たすまでの道のり」学会発表. 第 8 回ディベート教育国際研究会大会. 2022 年 3 月 6 日.
- 塩原洋二 (2022b) 「高校生への即興型英語ディベート指導：未経験教員が生徒と大会出場を果たすまでの道のり」『明治大学教職課程年報』 44, 75-80.
- 塩原洋二 (2024) 「パラグラフライティング・ディスカッションを高める英語表現Ⅱ（新・論理表現Ⅱ）の授業：検定教科書の使いどころ・+αで何が必要か？」『英語授業研究学会第 35 回全国大会発表資料集』
- 東大ケーススタディ研究会 (2009) 『現役東大生が書いた地頭を鍛えるフェルミ推定ノート』 東洋経済新報社
- 中川智皓 (2017) 『授業でできる即興型英語ディベート』 パーラメンタリーディベート人材育成協会
- 波頭亮 (2004) 『思考・論理・分析：「正しく考え、正しく分かること」の理論と実践』 産業能率大学出版部
- 松本茂・Robert L. Gaynor・Gail K. Oura (2017) 『速読速聴・英単語 Opinion1100 ver.2』 Z 会
- Matteo, A. (2021). *What is NIMBY?* VOA Learning English. <https://learningenglish.voanews.com/a/what-is-nimby-/5828293.html> (Last access: 22nd September 2024).
- Muranoi, H. (2000). Focus on form through interaction enhancement: Integrating formal instruction into a communicative task in EFL classrooms. *Language Learning*, 50, 617-673.
- Sandel, M. J. (2010). *Justice*. Penguin Books.
- Sandel, M. J. (2012). *What money can't buy: The moral limits of markets*. Farrar, Straus and Giroux.
- Seo, B. (2023). *Good arguments: How debate teaches us to listen and be heard*. William Collins.